

平成22年度第3回経営協議会議事要録

日 時 : 平成22年11月18日(木) 13:30 ~ 15:40

場 所 : 大会議室

出席者 : 谷口 功、安部 眞一、田口 宏昭、森 光昭、山本 晃、岩岡 中正、古島 幹雄、
原田 信志、猪股 裕紀洋、伊藤 晴夫、江口 吾朗、岡村 宏、小栗 宏夫、
田川 憲生、遠山 敦子、船津 昭信、星子 邦子、村田 信一、吉丸 良治

欠席者 : 山村 研一

新任委員の紹介

議長から、資料1に基づき、中島 最吉 委員の後任として 岡村 宏 委員が就任した旨紹介があった。

議事要録の確認

平成22年度第1回会議議事要録及び第2回会議(書面会議)議事要録が確認された。

議 事

1. 平成22年度人事院勧告に伴う熊本大学役職員の給与等の取扱い及び国立大学法人熊本大学役員給与規則の一部改正について

議長から、本学の役職員の給与等の取扱いについて、平成22年度人事院勧告を受け10月21日の役員会において、人事院勧告を重要な参考材料として対処することが了承され、現在、政策調整会議において本学における取扱いを検討し、教職員組合と交渉を行っている旨報告があった。

次いで事務部から、資料2-1に基づき、人事院勧告の概要等について説明があった後、議長から、本学役職員の給与等については、役員会において了承された「平成22年度人事院勧告に伴う熊本大学役職員の給与等の取扱いについて」の考え方を基に検討することとしたい旨提案があり、審議の結果、了承された。

了承されたことを受け、議長から、「平成22年度人事院勧告に伴う熊本大学役職員の給与等の取扱いについて」に基づき人事院勧告に準拠して役員給与を改定するにあたり、国立大学法人熊本大学役員給与規則の一部改正について審議願いたい旨提案され、次いで事務部から、資料2-2に基づき、改正内容について説明があり、審議の結果、原案のとおり了承された。

報告連絡

1. 平成21年度に係る業務の実績に関する評価結果について

議長から、6月10日の本会議において審議された第1期中期目標期間の業務実績評価のうち、

平成21年度に係る業務の実績について、11月5日付けで国立大学法人評価委員会から評価結果が通知された旨報告があり、次いで田口理事から、資料3に基づき、評価結果の概要について説明があった。

なお、議長から、6月に併せて提出した学部・研究科等の現況分析等の「教育研究の状況に係る評価」については12月末に、第1期中期目標期間全体の評価については来年3月頃に、それぞれ評価結果原案が各大学に提示される予定である旨付言があった。

2. 平成21年度決算について

議長から、平成21年度決算について、6月10日の本会議において審議された平成21事業年度財務諸表が6月30日付けで文部科学大臣による承認を受け、また、第1期中期目標期間終了時における積立金の処分についても、同日付けで2億3千万円が次期中期目標期間に繰り越すことが承認され、当該繰越金については第2期中期計画において定めている「前中期目標期間繰越積立金」として「教育、研究、診療に係る業務及びその附帯業務」の財源に充てる旨報告があった。

次いで事務部から、資料4-1～4-4に基づき、各財務指標の分析結果等について説明があった。

意見交換

議長から、本学への提案、取り組むべき課題等について自由に意見をいただきたいとの発言があり、種々意見交換が行われた。

意見交換の概要は次のとおり。

熊本大学の学生には、我々の街づくり等の活動に多数ボランティアとして参加いただき、感謝している。社会との交流という点において非常に有意義だと思われるので、引き続き協力をお願いしたい。

また、例えば、永青文庫史資料の解読や研究等において、学生の力を活用する取り組みを考えてはどうか。それが、体系的でなく散発なものであったとしても、その成果を公表することにより世間の注目や関心も高まり、研究推進の足掛かりになるのではないだろうか。

大学側が考える「人づくり」の頑固さがあっても良いかと思う。大学は、職業訓練予備校ではないし、また、学生が社会に出たときに問われるのは、創造性や柔軟性である。最近、他大学も含めて学科再編等を見ていると、大学の意思というよりも、社会に合わせて大学の仕組みを変えているのではと感じている。もちろん、経営面や学生の就職も大前提ではあるが、「熊本大学が育てる人間」そのあり方に関する議論を含めて、PRしても良いのではないか。

私は、熊本大学の概要やホームページから、熊大カラー、熊大らしさというものは感じている。善し悪しは別にして。市民目線でアプローチするとき、どこにどのような形で伝えていくかという手法は少しずつ変わっていくが、「頑固なまでに守り通すもの」と「時代に即応して変えていくもの」の仕分けが大切だと思う。

それと各分野で活躍している在学生、卒業生、教員等を熊大人材マップとして見直してはどうか。また、男女共同参画への取り組みやその成果等についても、わかりやすい形で市民に伝えてはどうか。

学生が頼りないと言われる風潮について認識はある。本所の採用の場合、他の有名大学出身者の応募が増加しており、熊本大学の卒業生の割合は以前に比べると減ってきているが、決して劣

るというものではない。

一般的に社会に出て伸びる人は、「軸」というものがしっかりしているように感じる。「軸」とは、言い表しにくい「自分を愛し、家族、地域、国を愛し」常に前向きに取り組むということかと思うが、その「軸」がしっかりした学生を、大学というより、むしろ各学部が育成するという考えも必要ではなからうか。

学生に元気がないと言われるが、今は国全体に元気がない。大学の教育でどこまでやれるかということだが、ある高校の先生から、「熊本大学に入学してくる学生は、親や学校に対していい子で、なかなか自分から考えて新しいものに取り組むということがないのではないか」という話を聞いたが、大学入学までの教育環境や教育過程を考えれば限界もあるかと思う。大学としての役割は、どの部分かという議論も必要であるが。

一方、学生と相対するのは教員であるから、教員を元気づける施策の方が早いのでは。

教員を元気にするという意見には賛成である。学生も教員も元気になるためには、大学とは何かということをお互いに考える必要がある。先程の話のとおり、社会が求める職業訓練校的なものが大学なのか。医学系も同じで、良い医師を育てることに力が注がれてきたが、一方では、基礎医学を担う研究医の育成も言われ始めている。それらを含めて、大学が社会に送り出す人や知識について、議論する必要がある。

議論の続きで言えば、今の学生は今の文化の中で生きているのだから、学生の考えに合わせることも必要で、その考えを伸ばす方法が重要ではなからうか。年寄りの考え方を置き換えて議論することはどうかと思う。

また、大学が面している課題については、あれもこれもということではなく、課題を絞り込んで解決していく方が良いのではないか。

資料や説明等から「熊本大学は良くやっている」と率直に感じている。国立大学が法人化され、第1期中期目標期間が終わり、どの大学も大学法人という仕組みの面で、自らが意思決定し、自立的に大学を運営するということが浸透してきたものと思われる。第2期に向けては、数字として出てこないところ、まさしく学長が言われた、教育の高度化や国際化等がこれからの力点かと思う。昨今、日本は国際的な場において、誇りと自信を失いつつある。過剰に失っているとの感じも見受けられるが。これを改善する力は、私は大学だと思っている。日本には、人材しかないわけで、良い人材を育てるには初中教育も大切だが、大学が変われば自ずと初中教育も変わってくる。

そういう意味を含めて大学に望むことは、入学した学生に対し、様々な分野や組織で活躍するリーダーとなるために、自分の知識を高めるだけではなく、他者のため、世の中のため、国のため、世界のためにという志を諭していただきたい。次に、教養教育の充実である。各学部がそれぞれ実施するものではなく、大学としての教養教育を議論して、それをカリキュラムに転じ授業化してほしい。そして、それを学生に教授する教育方法の開発も重要と思う。

大学の姿勢として、教育の大事さ、教育の質の向上というもの目指し、根本からもう一度考えていただきたい。

現在の入試制度では仕方ないことかもしれないが、受験戦争に巻き込まれるうちに、創造性が失われていくように感じる。当然のことながら、大学は勉強するところであるが、今の学生は勉強のやり方や喜びを知らないで入学するのではと思う。大学では、勉学の楽しさ、知識を得る喜びも学んでほしい。また、学生の目線でという話もあったかと思うが、教員がきちっとした考えを持っていれば、教員主導であっても良いと思う。勉強するということは、知識を得ることと同時に、考える力をつける、物事の見方を養う、つまり人間としての基礎をつくるということは大

学で担っていただきたい。

もう一つは、カリキュラムを今日的に変えてほしいということである。これほど、社会が激しく変化している中で、これまでと同じようなカリキュラムで教育しているように感じられる。場合によっては、学部を新設するなど。このような経済状況下では難しいかもしれないが。

学生が社会に出たときに、大学生活と社会の激しい変化とのギャップにとまどいを感じるということはあるかもしれない。このような激しい変化の中では、過去の成功体験はかなぐり捨て、チャレンジする気持ち、そういった風土を植え付けることが大事だと思う。変化する状況に積極的に関わる気概を持った人材が、伸びていくように感じている。勉強の効果とは、変化を早く理解し自分のものにし、具体的な仕事に結びつけるということだと思う。

また、国際化に関しては、学生の留学等を積極的に進めるべきだと思う。その経験が生きてくるのは、社会に出てからだと思うが。経済界では、アジアの経済成長力をどのように取り込むか話題となっている。地理的な面からも、アジアを意識しておく必要があるかと思う。

それと、授業改善アンケートについてだが、今の学生はどういう授業を要求しているのかお聞きしたい。

一般的に言えば、教員が一方向的に話し、板書したりするような講義は、まったく受け入れられない。例えば、分かりやすい講義、板書も箇条書きで等である。書き殴るような板書は、評価が良くない。そういう点では、教員も苦労している。

また、自分で勉強する、理解できなかった点は教員に質問する、自分で調べるといった姿勢は見受けにくく、勉強は授業時間内に全て終わってしまうという感じである。

学生が求めているものは、昔も今も単位だけだと思う。ただ、昔と今が違うのは、学生が教員に単位をねだることができないことである。このことが、教員と学生とのコミュニケーションの希薄さの一因でもある。

私の立場は、優秀な医者を育成することである。常に「外を見て、上を見て」と教育しているつもりだが、若い医師の多くは専門医を目指し、その中でリーダーとなって、引っ張っていくという考えにはなってくれないのが現実である。「自分を愛し、家族を愛する」という考えはあるが、「地域や国のため」という考えを持つ学生は、皆無ではないが、以前より減ってきていると思われる。また、国際学会に出席して感じることだが、日本の医師全体の活力が失われてきている。若い医師達の感覚の問題かと思うが、世界をリードしていく必要はなく、むしろ最新の情報をうまく活用すれば良い医療ができ、それで十分という感じにもなっている。どのような医師を育てていくべきかという点が揺れ動いている。

電気会社を経営した経験を大学に役立てるかという観点でお話ししたい。大学運営の足元を強化することは重要で、大きな要因としてガバナンス問題と財務の問題を感じた。本日の議題の役員報酬の削減について賛成はしたが、なぜかという疑問もある。良い経営をするためには、適正な報酬が必要だと考えるからだ。財務についても努力されていると思うが、財務体質のあるべき姿を明確すべきと思う。先程、中期目標期間の評価について報告があり、優等生の評価と思われるが、議論となっているのは、優等生で良いのかということかと思う。国の交付金で運営することから、国の評価は当然なことであるが、しかし、それは半分であって、残りの半分は自分たちの特色を出し、自分たちで決めることが独立行政法人の独立の意味という気がする。

また、企業として学生を採用する場合、当然専門性は重要であるが、今後の変化にいかに対応するかという資質と地域的や歴史的な校風というものが重要ではないかと思う。

もう一つは、グローバル化の中で地政学的にも有利なアジアを大学の特色にすべきと思う。

志やチャレンジ精神という議論は、まさにそのとおりと考える。ただ、大学の会議は、全て細

分化され機能的なシステムとなっており、大学のビジョンや公共性等を議論し、それを合意形成する場が、あまりにも少なかったという気がする。

なお、文系について言えば、文系固有の問題かと思うが、学部間、個人間に垣根があると感じる。文系には、学問は個人で行うものという風潮があるが、それを大切にしながら、協働での教育や研究を推し進めることも重要かと思う。

以 上

次回開催：平成23年1月20日(木)13時30分から

<配布資料>

- 資料 1 国立大学法人熊本大学経営協議会委員名簿
- 資料 2 - 1 平成22年度人事院勧告に伴う熊本大学役職員の給与等の取扱いについて
- 資料 2 - 2 国立大学法人熊本大学役員給与規則改正概要(案)ほか
- 資料 3 国立大学法人熊本大学の平成21年度に係る業務の実績に関する評価結果 ほか
- 資料 4 - 1 平成21年度国立大学法人熊本大学財務指標比較(グラフ)
- 資料 4 - 2 国立大学法人の財務分析上の分類
- 資料 4 - 3 平成21年度国立大学法人熊本大学財務指標比較
- 資料 4 - 4 熊本大学財務指標比較推移一覧(H16~H21)
- 参考資料 平成21事業年度財務レポート